

キェルケゴール協会2018年大会シンポジウム 「ルター、キェルケゴール、カール・バルトにおける 聖書と教会」(報告)

須藤 孝也

1. 本シンポジウムを企画した動機

2018年の学術大会ではシンポジウムを開催することに決まり、理事会は、どのようなシンポジウムにするか、会員に企画を募った。その中から選ばれたのが報告者の企画、「ルター、キェルケゴール、カール・バルトにおける聖書と教会」であった。報告者がこのようなシンポジウムを企画した動機について説明するところから始めてみたい。

周知の通り、キェルケゴールは哲学する者であるのみならず、信仰する者でもあった。たとえ哲学研究の枠内でキェルケゴールを研究するのだとしても、キェルケゴールその人が信仰する者でもあった以上、いかなる哲学的研究も、信仰するキェルケゴールについても何らかの「処理」をしなければならない。信仰の問題を含めて思想研究を行う場合はもちろんであるが、たとえ信仰の問題には立ち入らずに研究を進めるのだとしても、そうした処理は決して無意識になされえず、必ずある理解をもってなされる。

哲学研究としてなされるキェルケゴール研究の多くは、キェルケゴールがキリスト教を持ち出すところで論理の追跡を止め、そこから先は、「キェルケゴールはキリスト教の信仰者だから」〇〇と信じていたと処理する。あるいは、キェルケゴールはキリスト教を信じた上で／先で、〇〇と哲学したというふうにして、哲学研究としてのキェルケゴール研究を行う。だが、そもそも哲学と信仰は、そのようにここまでは哲学、ここからは信仰と明確に二分することができるものであろうか。いわば信仰のうちでも哲学が作動し、哲学のうちでも信仰が作動しているというようなこともあると思われる。たとえば言うならば、確かに水

と土は別のものとする事ができるのだとしても、実際には、水と土の間に、それらが混ざり合った泥や泥水があるように。これは泥水ではなく土だと言うとしても、厳密に言えば、土でさえもわずかばかりの水分を含んでいる。逆に一切の不純物を含まない水というものは、実際の自然界には存在しないであろう。キェルケゴール思想においても似たような状況があるのではあるのではないか。哲学と信仰が混ざり合うところがあるように思う。

哲学史にキェルケゴールの思想を据える作業は、その正確性はなお高める余地を残しているとしても、これまですでに多くの研究者によって積み重ねられてきた。では他方、キェルケゴールの信仰の仕方はキリスト教史のなかにどのように据えられるのか。それは一般的なキリスト教の信仰の仕方なのか。それは一般的なプロテスタンティズムの信仰の仕方なのか。もしそうではないとすれば、その特殊性はどこにあり、それは何に由来するのか。

キェルケゴールの信仰の特徴や特殊性は、言うまでもなく、キェルケゴールの信仰論だけを考察対象として研究を進めても、決して明らかにはならない。それを明らかにするためには、他の信仰者による信仰の仕方と比較する作業が不可欠である。だが、我が国の哲学研究者の多くは、キリスト教の歴史についてあまり積極的に知ろうとしない。キェルケゴールを哲学的に研究する者についても同様である。だが、哲学史のことはよく知っているが、キリスト教史のことはあまり知らずに、哲学と信仰を合わせもったキェルケゴール思想について論じるというのは、やはりバランスが悪いと言わなければならない。

以上のように考えて、報告者は以前から、キェルケゴール研究者の間で、キェルケゴールの信じ方の特徴についてより精緻な理解を模索する共同作業の必要性を感じていた。できればキェルケゴール以外の専門家も交えて学べる機会を持ちたいと考えていた。だから今回、シンポジウムを企画するチャンスを得られたことを心から喜んでいた。

だが実際、シンポジウムを企画する段になると、考察の範囲を限定しなければならないことに気づいた。そもそも時間はそれほど長くはとれない。せいぜい2時間程度である。キリスト教史を概観して、そこにキェルケゴールを据えるところまではどうていいかない。中世までの、あるいはカトリックの信仰論を

参照することは諦めざるをえなかった。

プロテスタントの信仰論に限定したとしても、なお大きすぎた。それなりに内容のある提題をしてもらおうと思うと、一人につき最低でも20分はみなければならぬ。キルケゴールに関する提題は欠かせないのだから、あと二つの提題しかしてもらえない。バランスを考えて、キルケゴールより以前のプロテスタントから一人、キルケゴール以後のプロテスタントから一人選ぶことにした。それぞれ一人ずつということになると、歴史上目印になるメジャーな人物ということになる。そうした事情により、ルターとカール・バルトをピックアップすることにした。

また、信仰の中身の方も限定しなければならなかった。というのも、信仰論の内容もまた多岐にわたるからである。それぞれの提題者が、ばらばらの主題をピックアップし、その人物の信仰について論じても、容易に比較することができない。それでは有意味な対話の場とはなりにくいだろうと考え、信仰論の内容も聖書と教会に絞ることにした。

聖書について取り上げようと考えたのは、キルケゴールが、自説を展開する際に聖書にその根拠を求める福音主義者だからである。上にも述べたように、多くのキルケゴール研究者は、キルケゴールが「聖書にそのように書いてあるから」と言えば、それ以上の詮索をしない。だが言うまでもなく、聖書を読み、それに基づいてなされる主張は無数にある。「聖書に基づく」その仕方は様々あるということである。18世紀の批判的、歴史的聖書学の前と後で、すなわちルターとキルケゴールの間で、どのような聖書に対するアクセスの仕方の変化があるのか。キルケゴールはどのような意味でルターに連なり、どのようにしてそこから離れていくのか。一口に「ルター派」と括ることなく、両者の違いにも目を向ける必要がある。またそうした展開は、20世紀のカール・バルトに至って、どのような評価を受けることになるのか。現代に至るまでの展開を概観するためにも、カール・バルトの聖書観も参考にする必要があると考えた。

言うまでもなく、聖書は権威づけられて初めて「聖書」として流通する。権威づけのメカニズムは、教会や社会制度の在り方と密接に関係する。デンマー

クの絶対王政、ならびに国家教会ないし国民教会のうちでキェルケゴールが聖書に認めた権威と、領邦教会制度を作ったルターが聖書に認めた権威、あるいは第一次大戦で混乱したドイツでバルトが聖書に認めた権威は、各々の特殊性を備えている。また、聖書の権威は、それを正典として認める教会の権威に大きく依存している。教会が未規定のままでは、聖書も宙に浮いたままである。聖書と合わせて教会についても観る必要があると考えた。

彼らの信仰論のうちで教会はどのように捉えられているのか。カトリックにとっての教会は、プロテスタントにとっての教会よりもはるかに大きな決定権を有していたことは周知の通りである。だがそうしたカトリック教会のプレゼンスの大きさと比較するばかりでは、プロテスタント教会のプレゼンスは限りなくゼロに向かって切り詰められるばかりである。とりわけ「単独性」や「内面性」を鍵語とするキェルケゴールにおいては、教会の存在理由は非常に見えづらい。国民教会から国家教会の移行について、キェルケゴールはどのような認識をもっていたのか。キェルケゴールの教会理解は、プロテスタントの歴史のなかで一般的なものなのか、それとも特殊なものなのか。ルターやカール・バルトの教会理解と比較することで、一定の特徴付けが可能になるだろうと考えた。

2. 各提題の要旨

各提題の中身については、他の章に掲載されているので、詳しくはそちらをお読みいただくことにして、ここでは簡単に要旨だけを記すことにする。

ルターに関しては、阿部善彦氏に報告していただいた。報告によれば、人間は自らの救いのためには何もしないというのがルターの基本的な考え方である。救いは神の専権事項であり、人間の功績は神が恩寵を与えるか否かについて何らの影響力ももたないということをルターは聖書に読み取った。これは、人間は善を選択する力を根本から喪失しているのであり、そのような人間が救われるためには神の助けを待つよりほかないという、原罪論から帰結することである。より正確に言えば、ルターによれば、善は自由意志が可能となるために必要な、意志に先行する内的規範性であるから、人間は善悪に対して自由ではないのである。ルター以前のドゥンス・スコトゥスやウィリアム・オッ

カムらによる「新しい道」の神学は、すでに、神がもつ自由に類比的な自由を人間に認めていた。この人間的自由が近代において大きく展開する点からすれば、ルターは反時代的であったとすることができる。

教会に関しては、周知のように、ルターは全平信徒をも祭司と認めた。だが、こうしたルターの決定は、本人の意に反し、既存の権威によらない自律的な集団が各地に発生することを促すことになった。そこでルターは方針を改め、世俗権力のもとに教会を据えることにした。領邦の領主の支配権を神的に正統なものと認めたのである。そうしてルター派の教会は領邦教会となった。

次に、キルケゴールが聖書や教会についてどのように理解していたのか、鹿住輝之氏に報告していただいた。一般に主観的なもの／主体的なものに大きな価値を置く／と解されるキルケゴールだが、実際は、聖書や教会、 sacrament を指示する「客観的なもの」をも、人間が神に関わるために必要不可欠なものとしている。というのも、通常人間は、神との間に媒介なしに、神と直接関わることはできないからである。もちろん、そうした客観的なものは「最初の恩寵」、すなわち信仰生活の入り口を人間に開くものであるにすぎない。その後各人の長い日々の信仰生活が続く。そこで繰り広げられる実存の発展に関して、キルケゴールは様々な先駆的な試みをした。だが入り口がなければそうしたものが始まり得ないことからすれば、最初の恩寵を決して重要ではないものとは言えないのである。

なお、キルケゴールは自らを「修正剤」として理解していた。すなわち、既成体制の偏りを是正する者として自己を理解していたのである。ここにも、キルケゴールは教会を含む既成体制を否定する者ではなかったことがうかがえる。

カール・バルトに関しては、阿久戸義愛氏に報告していただいた。バルトによれば、聖書は、神と人間の「無限の質的差異」を示すものである。両者の差異を取り消す方へと進んだシュライアマハー以降の近代神学を、バルトは厳しく批判する。「人間は神に仕えるために造られたのであって、神が人間に仕えるために造られたのではない」と端的に言われている。この質的差異で隔てられた人間を和解者イエス・キリストが再度結びつける。聖書は、神が人間の罪

を赦し、恵みとして新たな契約を結んだことを証すものである。

神の愛を受け取り、自らキリスト教的愛を行う「新しい人間」が協同することによって、教会が打ち立てられる。神がこの世を愛したように、教会もまたこの世を愛する。それはまた神を愛することでもある。とはいえ、この世を愛するということは、必ずしもこの世に倣うことを意味しない。むしろこの世を救うようにして、教会はこの世に関わるのである。この世を救うことは、この世に伝道することによって、すなわちこの世に対して福音を証すことによって果たされる。

3. 提題を受けて

各氏の提題によって、確かに三者はともにプロテスタントであったのだが、それにもかかわらず各々が関心を抱いた問題は様々で、少なからず異なるものであったことが明らかになった。宗教改革を断行したルターにおいては、なお議論の前提はカトリック的なものであったし、キェルケゴール思想はデンマークの国家教会の状況を抜きにして理解することはできない。カール・バルトのキリスト教についての語りや、第一次世界大戦を経た後のドイツないしヨーロッパの状況に対する批判と不可分であることは一目瞭然である。そうしたことは、ルターやキェルケゴールやバルトが各々の状況の中でしか考え、信じることができなかつたと見ることもできようし、目の前の状況を責任をもって引き受けたと肯定的に見ることもできよう。いずれにしても、そうした紆余曲折を経て、現在の宗教ないし哲学の状況がある。

以下、特に報告者の関心をひいた三つのトピックについて振り返ってみたい。

まず一つ目は自由意志についてである。全体討論の場で阿部氏が指摘されたように、現代の私たちは、ほとんど自動的に、人間が善を行ったり悪を行ったりする存在であると捉え、とりわけそこに自由な意志の働きを想定する。そしてまた、そうした理解をもってキェルケゴールやバルトを読むことが相当程度可能である。その背景には、18世紀の啓蒙以降、人間は自律的な「能力」を備えた存在であるとの理解が浸透し、啓蒙から立ち上がった近代国家において、私

たちは、善や悪をなす能力を備えた存在として、自らがなす行為の結果を、宗教的と言うよりも社会的に、あるいは法律を介して引き受けて生活しているという事情があろうかと思う。

とはいえ実際には、「私たちには能力がある」というのは、あまりにも漠然としている。私たちにはできることもあればできないこともあり、その境が話題にならない限り、「私たちには能力がある」といっても、ほとんど何の意味もなさない。

実際、生活のうちで、自分を「能力を備えた主体」と感じるのは必ずしも容易ではないように思う。ルターが言うような「神の前の無力」とは異なるのだとしても、現代人もまた、世界があたかもコンピューターに制御されるかのよう「オートマティックに」更新されていくのを前に、しばしば自らの無力を感じる。とりわけ、自らが「コンピューター」が指示するのとは異なる方向に進もうとするときには、そうである。

コンピューターに関わる場面だけではなく、目に見える他者と関わる場合においても、意義ある関わりをすることは決して容易ではない。各人がその時点までに作り上げた意味体系は、たとえこちらが真摯に関わったところで、いかなる書き換えをも拒むほどに堅固に構成されているかのようにしばしば思われる。他者のうちに変化を引き起こそうとすればするほど、他者関係のうちで自らの能力を実感するのは難しくなる。

そうした現代の無力感は、ある意味では啓蒙のオプティミズムよりもルターが描いた無力な人間に近いとも言える。とはいえ、ルターが見ていたのは、あくまで人間の神との関係であり、社会や他者との関係ではなかったことからすれば、現代の状況を、ルターの議論を援用して読み解こうとしても、小さからぬ限界があることも認めなければならない。では、キルケゴールは、こうした人間の能力／無能力についてどう考えていたのか。阿部氏には、キルケゴールは近代的自由意志論者と見えたようだが、実際はどうなのか。阿部氏の提題により、報告者はこの点についてよく考えてみたいと強く思うようになった。

二点目は聖書についてである。阿久戸氏が全体討議の場で述べたように、三者はともにプロテスタントとして、「聖書をきっちり読む」ことで真理を見出

し、議論の場でも聖書にそのように書いてあることを論拠として自らの主張を提示する。言うまでもなく彼らがそうするのは、ルター派の福音主義の伝統によっている。しかし、三者がともに福音主義者であったため、福音主義そのものが問題化されずに終わってしまった。

三点目は教会に関してである。私見によれば、カトリック教会は、キリスト教の真理を哲学的・神学的に探究する「深い信仰」をもつ人々と、「浅い信仰」をもって慣習・文化レベルでキリスト教にコミットする人々とを結びつけておく、一つの安定したモデルを体現していた。前者は教会や修道院で生活する神学者や修道士たちであり、後者は圧倒的に多数の平信徒たちである。敬虔な平信徒もちろん存在するが、カトリック教会は、両者各々に高い独立性を許容していた。

この観点に立って言えば、プロテスタンティズムは、両者の間にある垣根を取り払い、できる限り平信徒をも深い信仰をもって生きる存在へと教化しようとする試みであったと言えるだろう。世俗化に抗して「キリスト教界にキリスト教を再導入しよう」というキルケゴールのプロジェクトもまさに、浅い信仰をもって文化レベルで信仰生活を送る平信徒たちを深く信仰するキリスト者へと構成し直そうとするプロテスタントの企てそのものであった。その著作活動によって、他の信仰者たちにも深い信仰生活を生きるよう促したというのが、キルケゴールに関する最もシンプルな理解である。そうした中で鹿住氏は、キルケゴールが「客観的なもの」について語るところに照明を当てた。多くの研究者が見落としがちなキルケゴール思想の側面、言わばその「裏地」を開いて見せるような今回の提題は、従来のキルケゴール理解にしかるべき修正を迫るものであり、高く評価することができる。

とはいえ、議論はこれで尽くされたわけではない。たとえキルケゴールが「客観的なもの」にしかるべき地位を与え、教会の「修正」を試みたのであって、それを廃棄しようとしたのではなかったとしても、いまだ教会のあるべき姿は明確にされるには至らなかった。

また、キルケゴールが「客観的なもの」や教会に余地を残すのだとしても、それは、キルケゴールが浅い信仰を許容したことを意味するのではない。むしろ

ろ全く逆に、世俗化に抗しようとするキルケゴールは、美的実存という概念を用いて浅い信仰を正面から批判し、それを深い信仰へと転じようとしたのであった。そこには「敬虔な」プロテスタントを見出すことができるかもしれないが、我々はこうしたプロテスタント的、キルケゴール的な反世俗化運動をどのように評価したらいいのであろうか。

俯瞰して言えば、確かにプロテスタンティズムの枠組みの中で、聖職者ならぬ一般人がキリスト教に対して深く哲学的にコミットできる余地は大きく増えた。ドイツ観念論などはそうしたプロテスタント的状况が生み出した最たるものの一つであろう。だがそのようにして、キリスト教は哲学的に解釈されるにとどまらず、解体されることにもなり、その裏面において、平信徒の浅い信仰生活においても、キリスト教は世俗生活へと溶け出していったことが忘れられてはならない。世俗化に抗することは必ずしもキリスト教を残存させないのである。むしろ世俗化が進行する状況のなかでは、信仰生活の明確化は、賛同者のみならず、非賛同者をも、さらには分裂する集団をも生みだすことになる。そのような状況のなかで、ミュンスターの伝統的な国家教会の信仰とは異なる信仰をキルケゴールやグルントヴィが提示したのではなかったか。19世紀以降現代に至るまでのそうしたプロセスに鑑みるとき、キルケゴールの信仰論ないし教会論はいかに評価しうるのか。今後も多角的に分析していきたい。